

東京蜘蛛談話会通信 No. 88 (1996年9月22日)
編集・笠岡文雄 / 印刷・本紙 東京都豊島区 プリント
付録 池田博明

※※ 1996年度採集観察会 ※※

場 所：神奈川県三浦市 小網代の森
第3回 10月20日（日）（雨天決行！！！）
集 合：京浜急行線「三崎口」駅改札口 10:00
世話人：安田明雄 ☎ 045-641-0763
(谷川明男)

・ 小網代の森へは京急バス「三
4」系統油壺(マリンパーク)行きで
・ 「荒井館前」下車、徒歩15分
・ 採集観察は白髭神社から石橋
・ を通って小網代湾の対岸まで
・ を予定しています。

今後の予定 第4回（最終回） 1997年2月23日（日）

品 川	横 浜	久里浜	三崎口
特 急 8 : 37	→ 9 : 00	→ 9 : 41	→ 9 : 54
快速特急 8 : 48	→ 9 : 06	→ 9 : 40	

♪ # 合同例会案内 # ♪

日時：12月1日（日） 10:00～

場所：目黒区立駒場住区センター (☎03-3496-2613) 次頁参照

東京都目黒区駒場2-22-4 (京王井の頭線「駒場東大前」下車徒歩8分)
多足類懇談会と合同による講演と懇親会

→ 世話人：桑原幸夫 (多足類懇談会 ☎ 0493-24-9324)

† † 同封のハガキにて出欠の連絡を事務局平松まで。近況は通信誌上に掲載します。 † †

◆◆ 第10回「だんわ会」採集観察会 ◆◆

日 時：10月10日（木）

場 所：川口市見沼たんぼ地域

集 合：JR京浜東北線「川口」駅東口
そごうデパート前 9番バス停
10:00 (要弁当)

世話人：平松毅久 (☎ 0492-33-8792)

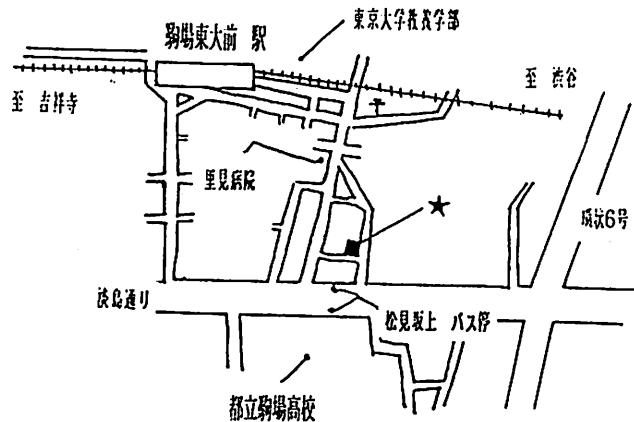
† 見沼たんぼ川口市部分は現在、
公園が計画されています。今
回の観察採集の結果は、(財)
埼玉県生態系保護協会を通じ、
公園計画への提言の一助にな
ります。

観察コース（次頁参照）：

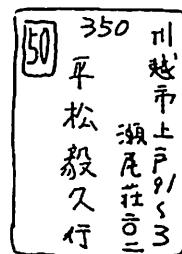
川口市立自然公園付近より → 見沼自然の家（屋敷林） → 金崎の森（斜面林）

! No. 89 原稿締切は12月末日 笠岡まで!

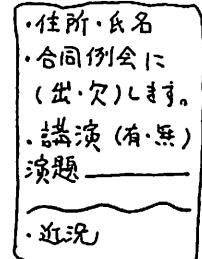
目黒区立駒場住区センター



ハガキの書き方

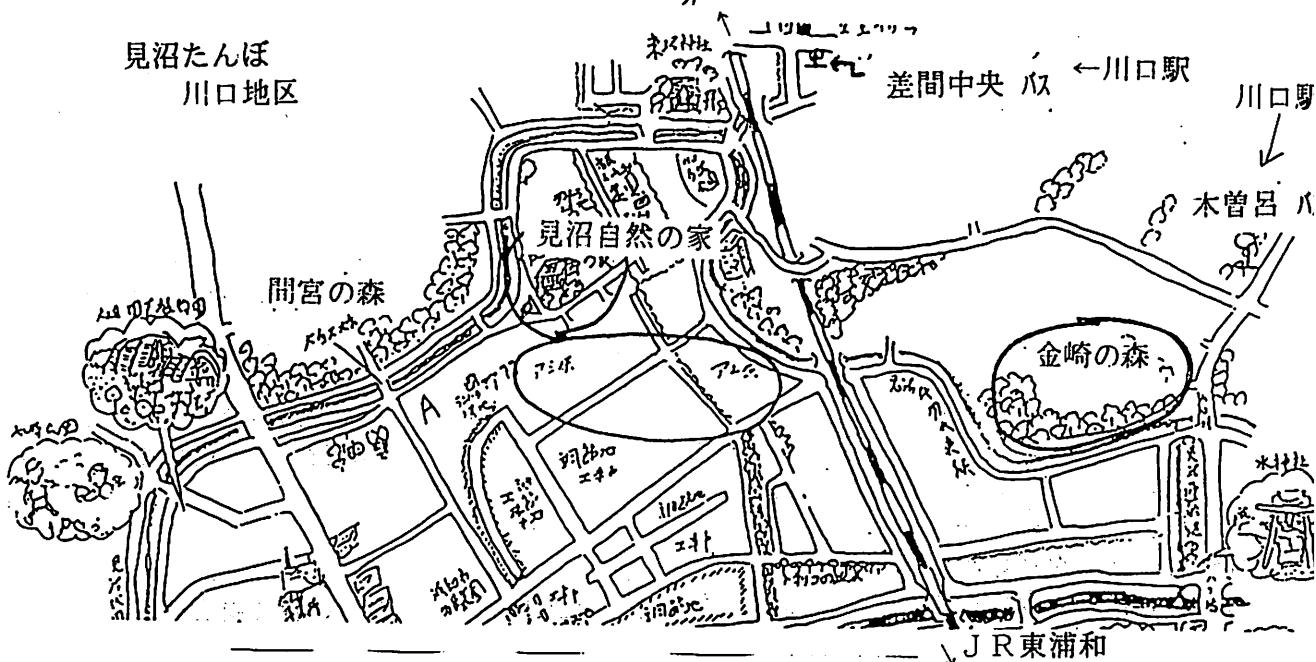


表



第10回「だんわ会」採集観察会

J R 東川口



採集観察会中間報告（三浦市小網代の森） 第1回 1996年5月19日（日）晴

参加者（50音順、敬称略）：浅間茂、梅田泰圭、緒方和、長田佐智子、織茂尚子、笠原須磨生、加藤ななえ、加藤むつみ、工藤泰恵、鈴木成生、佐藤幸子、新海明、高橋登、千田高志、中野隆雄、新村誠、西尾三枝子、伴満、前川隆敏、安田明雄、山川守、和仁道大 以上22名

カネコトタテグモ科 カネコトタテグモ住居

トタテグモ科 キノボリトタテグモF

エンマグモ科 ミヤグモy

ヒメグモ科 オオヒメグモF ヒメグモy カレハヒメグモF アシブトヒメグモf

カニミジングモf シロカネイソウロウグモy オナガグモF

サラグモ科 ヘリジロサラグモ

コガネグモ科 オニグモf ヤマシロオニグモy サツマノミダマシy コガネグモy
ゴミグモM, F, y ヨツデゴミグモy

アシナガグモ科 シロカネグモsp. m アシナガグモf ウロコアシナガグモM

ヒラタグモ科 ヒラタグモF

タナグモ科 コクサグモy クサグモy メガネヤチグモF ヤマヤチグモf

キシダグモ科 イオウイロハシリグモy

コモリグモ科 ウツキコモリグモF

ササグモ科 ササグモf

フクログモ科 カバキコマチグモy ヤマトフクログモF

アシダカグモ科 コアシダカグモy

カニグモ科 ヤミイロカニグモm キハダカニグモm ハナグモF, y
ワカバグモM, F, y アズチグモy

エビグモ科 シャコグモf アサヒエビグモy キハダエビグモM

ハエトリグモ科 マミジロハエトリM デニニツツハエトリグモm, F ネコハエトリM, F
ヨダンハエトリM, F メスジロハエトリM イソハエトリf
ミスジハエトリm, F カラスハエトリm ヤサアリグモM, m

以上48種

郵便振込口座番号 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会

会費は単年度で 一般¥2,800 学生¥2,000

会計は 安田明雄 〒231神奈川県横浜市中区元町5-219

採集観察会中間報告（三浦市小網代の森） 第2回 1996年7月14日（日）晴

参加者（50音順、敬称略）：池田博明、長田佐智子、笠原須磨生、加藤むつみ、木村知之、工藤泰恵、小池牧子、笹岡文雄、貞元巳良、佐藤幸子、高橋登、谷川明男、中野隆雄、長井芳夫、守桂子、安田明雄 以上17名

カネコトタテ科 カネコトタテグモF
トタテグモ科 キノボリトタテグモF
ウズグモ科 カタハリウズグモF, y, e
エンマグモ科 ミヤグモF, y, e
ヒメグモ科 オオヒメグモM, F, f, e ムナボシヒメグモF ヒメグモy
カレハヒメグモF, e ボカシミジングモF チリイソウロウグモF, e
トビジロイソウロウグモF シロカネイソウロウグモy
クロマルイソウロウグモF, e オナガグモy
サラグモ科 ヘリジロサラグモy ナナメケシグモM サイトウコブヌカグモM
センショウグモ科 センショウグモM, F
コガネグモ科 オニグモF, y ヤエンオニグモy アオオニグモy ビジョオニグモy
ムツボシオニグモy ヤマシロオニグモM サツマノミダマシM, y
ワキグロサツマノミダマシy ヘリジロオニグモy ズグロオニグモF
シロオビトリノフンドマシf コガネグモy コガタコガネグモf, e
ナガコガネグモF, f ゴミグモF, e ヨツデゴミグモF, e
ヤマジドヨウグモF, f ジョロウグモy
アシナガグモ科 オオシロカネグモM, F ヤサガタアシナガグモF
ヒラタグモ科 ヒラタグモm, f
タナグモ科 コクサグモm, y クサグモF ヤチグモ s.p.
キシダグモ科 イオウイロハシリグモy
コモリグモ科 ウツキコモリグモM, F チビコモリグモF
フクログモ科 ヤマトコマチグモF ムナアカフクログF フクログモ s.p.
ウラシマグモF ヤバネウラシマグモF
アシダカグモ科 コアシダカグモF, f
シボグモ科 シボグモy
カニグモ科 ハナグモy コハナグモy ガザミグモy ワカバグモy
セマルトラフカニグモF, e アズチグモm, y
エビグモ科 シャコグモF エビグモF, e
ハエトリグモ科 シラヒゲハエトリM, F, y マミジロハエトリM, F ヨダンハエトリM
ヤハズハエトリM, F, e メスジロハエトリF, y, e
マガネアサヒハエトリM イソハエトリM, y アオオビハエトリF
チャスジハエトリM, F ミスジハエトリm, F エキスハエトリ
アリグモF ヤサアリグモF

以上68種

1996年度東京蜘蛛談話会合宿後記 そして恐怖が始まった———合宿世話人始末

笹岡文雄

「来年は茨城で」。まさにその瞬間その言葉から、今年の合宿準備が始まったのです。1995年8月、珍品続出、世話人平松さんの大車輪の活躍で大盛会だった高知合宿が終わった時のことです。

数年前から”茨城はどうか”という声がチラホラ出ていました。それは何でもない普通のことですが、よりもよって’95年高知の次になるとは何という巡り合わせ。種類の豊富さ、また珍奇さで北が南とは勝負にならないことは、生物界では常識のことです。おまけに茨城に地の利はない、自分は旅行が嫌いだの三重苦で高知帰りの飛行機から、東京の町が見えた途端に戦慄が走る始末。

とはいえていつまでも震えているわけにもいかず、帰るとまずはともあれ茨城県の地図を引っ繰り返すことから始めました。また先にもらった「久慈川沿いは」という、新海明さんのアドバイスを都合良く思い出して、さっそく地図の久慈川沿いをたどることにしました。

地の利はないということは勝手なもので、取り合えず自分が苦労せずにいけなくてはならない、という結論をすぐに導きだしてしまうものです。となるとペーパードライバーの自分にして見れば、何はなくとも鉄道だ！ということになります。そしてそれがあるではないですか。見ると水戸から郡山へ続く「水郡線」はその路線のほとんどが、久慈川と絡み合うように敷かれていました。

こうなればもう半分決まったも同じ、後は宿舎をポイントに場所を見つければいいわけです。宿となれば民宿か、公共宿に目標を絞ったところ地図上とはいえ、見事大子町に一軒手頃なところを見つけることができました。

これも地図の上ながら、大子町を中心にしてそこそこクモも採れそうな地勢を見て、さっそく日帰りの偵察程度の下見に出かけました。日帰りですから宿の内容を確認しただけで、取り合えず自分だけ満足してそそくさと引き上げました。その日「予約は3ヶ月前からお電話のみでお願ひしています。」、という宿のフロントのお姉さんの言葉をさして重要とも思わず。

年内に一度八溝山の下見をして後で、いよいよ年が改まって4月の談話会総会で華々しく「茨城合宿8月3～5日」計画の発表をしました。実はこの時点で合宿4ヶ月前、ゆえに宿の予約はまだできていません。

総会直後の5月1日（予約可能初日）の朝一番、さっそく宿へ電話をするとこれがいくらかけても話し中、そして頭に浮かんだのは、あの「予約は電話のみ」言葉。しまったと思いつつも、大丈夫々々々と念じてリダイヤルを繰り返すこと1時間で、なんとか呼び出しに成功しました。

ところがこれで一安心と思ったのも束の間、「3日のお泊りはすでにいっぱいです。」

「通信」原稿は 笹岡文雄へ 〒170東京都豊島区北大塚3-12-21

電話口のその声は無常にもそういいました。合宿中止！談話会始まって以来の大失態！、頭の中を走馬灯の様にその言葉が走り回り、より強力な戦慄が背中を走りました。

発表済みの日程で今から新しい宿探しをするか、日程を変えてでも宿を確保するかのどちらかを選択しなければなりません。結局より大きな瑕疵を生むことを避けて、後者を選ぶことにしました。さっそくの大失態で、いきなりミソをつてしまいました。それでもそこを拝み倒して何とか、強引にも合宿開催までもっていってしまいました。

そして初日は名勝「袋田の滝」を見てもらいゆっくり夜間観察にと思いきや、一同さっそく滝の行き帰り、また周辺で最初の観察採集となりました。ところがその夜間観察、宿舎の周辺でと高を括っていたのが仇となって、もっとよい別の所に変えることとなる失態。貞元さん、金野さんお二人のフットワークに救けられて、観察場所を確保して、何とかその日を乗り切ったのでした。

この日の晩、地元の会員高橋米夫さんの訪問を受けました。予め地元にいらしゃることはわかつっていたものの、面識がなかったのでお声をかけないままでした。それをわざわざ宿まで足を運んで頂いた。

二日目は少し遠出して、県境にある八溝山（標高1022m）に登りました。登るといつても車で上がる登山道ゆえ、観察地までは順調に進みました。実はこの八溝山、3度下見に登って見ても、華々しくないです。これだけの標高があると高知などの平地と比べたら、クモでは勝負になりません。それではなぜそんなところを選んだのか、多少なりとも南にはいない北方系の種類がでればとの期待したのと、過去コケオニグモの採集例（採れないとは思いつつ）があったからでした。

後は途中の湧水地でその清き冷水を楽しみ、さらに先の山頂の展望でクモが駄目な分観光でと内心思っていました。ところが我が談話会を侮っていたバチが当たって、湧水地で待っていた私まで達した人は21名中で3名。聞いたところではみなさん、地を這うように採集を続けついにタイムアップ。それはいつものことで予想できたはずなのに、勝手に設定してまたしても失態でした。

午後は登山道入り口で採集後、もう一つの名勝「月待ちの滝」で小採集。でもそこはこの日の夜間採集予定地でだったのです。またしても貞元さん、木村さんを巻き込み、池田さんの車で夜間観察地探しとなりました。この時も貞元さんのご助言で、何とか絶好の場所を見つけられました。とある農家の裏山へ頼んでいれてもらったのですが、オオトリノフンダマシの交接やら何やら観察でき収穫の多い晩でした。

そんなこんなクモは採れないで失態だらけ、世話人とは参加者に世話を懸けるから世話人というはめになってしまいました。失態続き中をいやな顔一つされずに参加されたみな様に厚くお礼申し上げなくてはなりません。また特に現地にて車で移動のお手伝いを頂いた7名の方々（特にお願ひして車で参加して頂いた池田さん、泉さん、西尾さん）、観察地を探しに尽力下さった池田さん、貞元さん、金野さん、木村さんには感謝に絶えませんありがとうございました。

事務局は、平松毅久 〒350埼玉県川越市上戸91-3 瀬尾荘202

1996年「茨城」合宿 **感想つれづれ**

(50音順敬称略・駄々)

*工藤泰恵

茨城は私の育った県なので古里へ帰る気分で楽しみにしておりました。”八溝山はヤマセミが見られる”と聞いていたので万が一と、重い双眼鏡を持参しましたが、クモのいるところと鳥のいる所は別なのか双眼鏡は一度も使わざる残念！！でもクモはニューフェイス（私にとっての）がゾロゾロいて、ワー、キャーとほんとに楽しませて頂きました。何から何までお世話になった笹岡さん、”これ何？””これ何？”とうるさい質問にも常にやさしく教えて下さった貞元さん、池田先生、明さん、車に乗せて下さった泉さん、和仁さん、”万才もどき”の会話で楽しませて下さった小澤さん、モタモタおばさんをやさしく面倒みて下さった同室の方々……アーモう紙面がない……の皆々様ほんとうに有難うございました。

*長井芳夫

予てから名前だけは聞いていた袋田の滝に会えました。

途中でヤマカガシの蛙を飲み込む様子や、からだの何倍もあるカマキリをラッピングしてゆくナガコガネグモをフィルムに収めることができました。カジカガエルも間近でご対面できました、あんな尖った顔をしているとはおもいませんでした。宿舎の「やみぞ」のトイレのガラスにコカゲロウの仲間でしょうか3本の尾をもち、羽に赤い縁取りをつけた可愛い姿が見られました。

花はあまり見かけませんでした、コアジサイが蕾をたくさんつけていました。来年また参加できたら……と考えています。

*新村 誠

生れて初めて乗る水郡線の車窓から見る久慈川渓谷の素晴しさと宿の良さには感激しました。やや種類は少な目だったけれど夜間観察も含めてビギナーには本当に魅力的なクモ達に会えました。

キヌキリグモなど存在も知らなかったし、貞元さんのお蔭でキハダエビグモやキララシロカネグモは完全に覚えました。少しづつでも知識と交友が増えていくのを楽しみにこれからも参加させて頂きます。

*和仁道大

8月4日から6日までの東京クモ談話会の合宿に初めて参加しました。

特に印象に残ったのは夜のクモの観察会でした。日頃夜の観察はしていないので、夜のクモが活発に網を張ったり、餌を取ったりするところをよく観察できました。来年の合宿地は沖縄ということなので今から楽しみにしています。

今回幹事の笹岡さん大役ご苦労様でした。

KISHIDAIA 原稿は 木村知之へ 〒215神奈川県川崎市麻生区東百合丘4-38-12

茨城合宿報告
八溝山のキヌキリグモ

新海 明

今年の合宿は茨城県の奥久慈地方で実施された。東京クモ談話会では今まで一番縁が少なかった場所のひとつだと思う。

初日は名勝「袋田の滝」をめぐり、夜は宿舎近くで種々のトリノフンダマシ類を採集した。そして、二日目は茨城福島栃木の三県にまたがる八溝山へと車を連ねた。この合宿を担当した笹岡さんによる当初の計画では八溝山頂までは無理だとしても、途中の湧水群までは行けるだろうとのことだった。車道から標識に従って右折して山道へ分け入ると、ミズナラやブナが点在する林床は一面ササで覆われていた。みるからに「いそうもない環境」だったが、ビーティングやスイーピングをする人や地面にすわり込んでヤブの中に顔をつっこんでいる人など、みんな熱心にクモ探しを始めていた。私は今ひとつ気合が入らず高校生の水野君にクモの名前や網の特徴などを教えるながらブラブラと歩き続けていた。

そんな折、小峰さんが「これはなんでしょうか」と持ってきたクダビンをのぞくと、なんとキヌキリグモの幼体が入っているではないか。このクモは八木沼先生の1960年の図鑑ではアシナガグモ科に入っていたのだ。大学生の時に南アルプス山行を繰り返していた頃千枚岳で毎年出会ったクモだ。ツガなどの木にシート網を張っており、これがなぜアシナガグモ科なのかと思ったものだ。後に兄の進言でなんとアシナガグモ科からサラグモ科へと移されたと聞いている。そのきっかけは私が南アで見たシート網であったようだ。そんなクモと久しぶりに再会でき、遠い南ア登山の想い出にしばしふけることができた。

ここにはカナコキグモも多産していた。私は初めて見るクモだった。地表近くに濃密なシート網を張るクモのこと。この他にキンヨウグモなどもいて、ここ数年続いた南方系のクモとは一味違い「渋いクモ」達を改めて見直すことができた。

合宿を担当された笹岡さんは見知らぬこの土地に何度も通われて準備されたようだ。道を尋ねるハイカー達に答えるさまは八溝山の主のようだった。

最後に、地元常陸大子在住の高橋米夫さんが仕事の合間にわざわざ訪問して下さった。深夜の懇親会に出席していただいただけだったがとても嬉しかった。ここに御礼を申し添える。

合宿参加者：

池田博明、小澤實樹、加藤むつみ、金野晋、木村知之、工藤泰恵、小峰光弘、笹岡文雄、貞元己良、佐藤幸子、新海明、鈴木成生、千田高史、長井芳夫、新村誠、西尾三枝子、畠守有紀、伴 満、水野陽介、和仁道大（22名・50音順敬称略）

地元参加：

高橋米夫（1名）

NHK教育テレビ「やってみようなんでも実験」でクモの行動実験を取り上げ、談話会員の皆さんに協力をしていただいた。お礼がてら軽縁を報告しておきたい。

「準備から本番まで1ヶ月しかなかった！」最初の連絡は7月10日、番組制作事務所のY氏から「ムシの行動実験をとりあげたい」。決まっているのはミドリムシの走光性を利用して文字を書かせる実験だけ。クモの実験でもいいと言う。クモの行動実験のアイデアは神奈川県生物教育研究会で出したことがあったが、実現していかなかった。生きた動物を使うのだから時期が限られる。いつ撮影するのか尋ねてみると、なんと収録日は8月中旬で、放映日は9月だという。クモの実験時期としては最悪である。雄が準備できない可能性が高いのだ。野外実験せずにスタジオで収録したいという。採れるわけではない。しかし、生きたムシの行動実験という企画はもうないかも知れないと思い、イチかバチかやってみることにした。

「採集会や合宿でクモ探し！」7月14日(日)、東京蜘蛛談話会／三浦半島小網代での採集観察会の日である。参加者のみなさんにお願いして生きたハエトリを取っていただいた。ヤハズハエトリの雌雄(谷川さん)，同雌(工藤さん・木村さん・笹岡さん)，ミスジハエトリ雌(森さん)，メガネアサヒハエトリ(笹岡さん)，メスジロハエトリ雄(鈴木さん)，イソハエトリ雌雄(浜岡さん・及川さん・守さん)を探集していただいた。これらのうちヤハズは後日に実験の説明をディレクターにするのに用いた(しかし、オスは8月3日ごろ死亡)。活発なイソハエトリは威嚇行動するものの、手許では操作できず、撮影できそうもない。7月19日、フェロモン実験案として、同僚の高橋優子氏先生からカブトムシのアイデアをいただいた。しかし、時期遅れであること、他の種類も求愛行動があるということでボツになってしまった。Y氏から撮影で外國出張することになり、後任は決まっていないという。前途に暗雲がただよってきた。7月29日(日)に後任のK氏と打ち合わせ。スタジオ収録日と放映日が決まった。あまり時間がない。走性から反射を経て本能行動まで実験を考えた。ロケも可能というので、秦野の葛葉自然観察の森を企画する。さっそく「はだのネイチャーウォッキングクラブ」の浜岡史子さんに連絡して、森の使用許可を得る方策を聞く。8月3日(土)に森に下見に行く。なんと今年はアシナガサラグモの網は2個だけだった。ジョロウグモも少ない。8月中旬ならナガコガネグモの求愛時期だろうから、造網性のクモはナガコガネを主役にして考えてみよう。

8月4日(日)、茨城県常陸大子市で談話会の合宿である。笹岡文雄さんに参加者への採集依頼状を渡す。新海明さんからナガコガネなら東京都秋川市の広徳寺か、神奈川県秦野市葛葉緑地がよいと聞く。金野普さんからダンゴムシの交替性転向反応は「遺伝」に記事があったこと、「たけしの平成教育委員会」で取り上げていたことを聞く。和仁道大さんが観察会で音叉を使ってクモの捕獲実験をみせたところ、子供たちに大人気だったという。大人も子供も夢中になれる実験なら、じゅうぶん取り上げる価値がありそうだ。金野さんや初芝伸吾さんからヤマトシロアリやトラップについて教えてもらった。8月5日と6日の合宿中に皆さんが採集したハエトリを提供していただいた。ウススジハエトリ雄(初芝さん・木村さん・小峰さん)，同雄(鈴木さん)，デニッシュハエトリ雄(笹岡さん)，シラヒゲハエトリ雌(加藤さん)，デニッシュハエトリ雌(畠守さん)，メガネアサヒハエトリ雄(金野さん)，同雄(鈴木さん)，カラスハエトリ雄(加藤さん)，オスクロハエトリ雄(千田さん)，ヤハズハエトリ雄・オオハエトリ雄(貞元さん)。帰途に山片町の水田わきでナガコガネグモの雌雄が同居する網に雄を投入したところ、もといた雄が侵入雄を追い出し、数秒後に雌に求愛に行った。雌には拒否された。これならナガコガネで野外実験可能で、撮影できそうだと確信する。

「ナガコガネの♂を求めて」弓道部の合宿中の谷川明男さんに葛葉緑地を教えてもらう。伊豆ではまだナガコガネは幼体だという。葛葉緑地へ行ってみたが、入り口が分からぬ。伊勢原高校の高橋幸洋さんに葛葉緑地の入り口を聞く。8月8日早朝に葛葉緑地へ行ってみた。草が刈られていた。一角に残った草の所で、ざっと見て雄が2、雌亜成体5、幼体4。なんとかなる？この緑地も秦野市の管理だった。撮影前日に雌雄の状態を確認してみよう。それにしてもロケ撮影日はいつになったのだろう

か（連絡はやっと9日に来た）。浜岡さんからオガコガネの雌雄を多数発見との連絡があり、10日午後、守さん・浜岡さんに案内していただく。秦野南が丘高校の西側しがいの牧場の通りの側溝だった。成熟した立派な雌が数匹いる。餌条件のよいところらしい。溝にカメラが入らないので、葛葉緑地へクモを移すこととした。夜間、秦野南は丘から雌5頭を葛葉緑地へ移す。雄を採集。11日夜に再び現地調査。ここ1週間は予備実験や採集、現地調査で毎日が過ぎていく。採ったクモは徐々に弱ったり、死んだりするので、一寸先は闇である。

”威嚇行動が起こらない” 撮影当日の8月12日、K氏とS氏の両ディレクター、レポーターの佐々木仁子さん、カメラの西澤氏、録音技師、照明技師の6名と打ち合せ後、葛葉緑地へ。理由づけせずに次々に実験を見せる方針に転換したという。それならそれでもよい。もともと生き物が主役であって、私たち出演者は余計なものだから。導入シーン（ジョロウグモ幼）・網の紹介（コクサグモ幼）・落下反応（コガタコガネグモ幼）・音叉実験（ナガコガネグモ）・威嚇求愛実験（ナガコガネグモ雌雄）を撮影。雄の同居する網が無いので、雌の網に2頭の雄を入れたが、交渉せず、威嚇と求愛が撮影できない。採集しておいた雄7頭を全匹投入してみたが、なぜか、雨が降りそうだと、更に続行。にも起らぬ。スタッフがねばるうちに2時半。雨が降りそうだと、雄が工ノキの樹幹に網のあるナガコガネグモで2頭の雄が一瞬接触し、雌に接近した雄が拒否される。撮れた？ 一応撮れているという（しかし分かりにくいので番組には使用されなかつた）。求愛と威嚇が明瞭に撮影できなかつたのが心残り。S氏は17日に野外で昆虫の衣食住を撮影、番組全体の半分を昆虫にするという積極策を提案。昆虫は私にはガイドできないので、知人の槐真史さんに依頼した。名人登場のとき、クモはといわれ、クモが頭を下に向ける実験を提案する。後で平松毅久さんにこの実験のコツを教えていただいた。

”迷走する計画” 13日にペットボトルにバルサ板で足場を作成。自宅付近でナガコガネグモ雌を捕らえてボトルに入れる（結局この狭い空間では網を張らなかつた）。S氏よりクモ合戦がスタジオで可能かという質問あり。コガネグモを使うには時期が遅い。斎藤慎一郎さんの「クモ合戦の文化論」によればナガコガネグモでもクモ合戦をした歴史がある。見栄えのする戦いになるかどうか分からないと答える。14日横須賀市でハエトリを探す。雄はウデブトハエトリ1頭のみ。金野さんからシロアリが須賀市でハエトリの走化性の実験は中止になった（油性ボールペンで書いた線上をシロアリはきちんとたどって歩行し、この道しるべフェロモンは既に化学的に同定されている）。ナガコガネグモを昆虫飼育用の水槽に移し、四つの隅に足場として細いバラサを張る。夜のうちに網を張った。15日に横須賀市でさらにハエトリの雄を探す。ヒメカラスハエトリ雄（谷川さん採集）とウデブトハエトリ雄を採集した。ロケ台本とスタジオ台本がFAXで来たが、見るとハエトリの実験が消えてしまっていた。吉田嗣郎さんに探していただいたネコハエトリの威嚇の映像も使用しないことになつたといふ。16日は山北高校の全校登校日である。夜に箱根にウススジハエトリを探索に行く。以前はビーティングでいやというほど採れたのに、まったく採れない。

”昆虫の野外実験” 8月17日、2度めの野外ロケである。槐氏の案による昆虫行動実験を試みる。午前中から厚木市の相模川の山西でベイトトラップの仕掛け、河原でトノサマバッタの雄を釣る実験、トンボのなわばり防衛行動などを撮影。しかし、バッタ釣りは10月ならできるというが、成熟オスが少なく、反応は悪く撮影は難航した。ようやく槐さんの腕前でバッタを見事にだまして成功。トンボはモデルに反応せず、なわばり防衛行動が撮影できずに、暗い霧囲気が漂う。急きよ、槐氏が別案を出す。ギンヤンマの雄の腹背の青色を銀紙で隠して雌に見立てて飛ばすという。す早く飛ぶギンヤンマを捕獲できるのか、とにかく試みなどを用意していなかつたので、それを大変。レポーターの佐々木さんのソーキングセットを利用する。佐々木さんが糸を結んだり、トンボをおさえたりの大活躍をするつかまえに来た。アッという間1回だけだったが、ギンヤンマのオスがこの偽メスをつかまっていた。ベイト明日までこの虫は生きていますかね？」私「大丈夫でしょう」（実際にはアオオオサムシ・オオヒラタジデムシ幼虫などが入っていた。K氏「明日死んでしまった！」）。「前に番組に出たことがありますか」と聞かれたが、もちろん

「無い」のである。K氏「それにしてはアドリブで話せますね」私「生徒の前で話しているのだから」。実は私にはテレビが特別なものという意識は無いのであった。ナガコガネが網を張った銅育容器を9頭ほど東京へ車で持参してもらう。夜に槐さんから電話で、予備実験では背光反射で反転した小形のゲンゴロウがちっとも反応しないという。ハエトリで見せ場を作る必要がありそうだ。夜間にクモ合戦用のナガコガネを秦野市南が丘で8頭採取し、翌日ハエトリと共に持参した。

「本番直前まで実験の工夫が続く」 8月18日2時から科学技術館2階で打ち合わせ。リハーサルではムシ中心に撮影してもらうこと、本番と比べてよかつた方を使用すること、台本から削られてしまったハエトリの実験を復活することを提案する。他に考える余地もない。生きたハエトリの雄はオオハエトリ1頭、ウススジハエトリ2頭、ウデブトハエトリ3頭、ヒメカラスハエトリ2頭、チャスジハエトリ2頭とあったが、チャスジは活発すぎるので最初から失格。ウデブトハエトリはオスを見せると第1脚を上げたまま左右にジグザグに動くのだが、いかにも小さい。撮影の都合上、オオハエトリでいくことになる。

撮影はアクシデントはあったが、なんとか大事な映像は撮影できた。直前の打ち合わせ通り、(1)クモが下を向く、(2)カブトムシが上を向く、(3)ミジンコが光に集まる、(4)ヒメゲンゴロウが反転する、(5)昆虫野外実験(バッタつり、トンボつり、トラップ)、(6)ダンゴムシの行動、(7)クモ野外実験(落下、網をゆする、音叉など)、(8)ハエトリ雄に鏡を見せる、(9)ハエトリ雄に麻酔した雌を見せる、(10)ナガコガネのクモ合戦と収録した。ゲンゴロウは反転しなかったが、失敗の例として番組に残った。なにか未知の必要条件が不足しているらしい。マミジロハエトリのオスも鏡に正面させたが、鏡の中の像を見つめるだけで感嘆しなかった。予備実験と別の大きい個体を使用したのがマズかったようだ。種による行動の違いを見せたかったのだが、私もさすがに緊張していたらしく、撮影後の夕食はまったく味を感じなかった。

8月22日に編集が終わってようやく出来たという連絡が入った。なかなか面白くできた由。今回は多くの方に手伝っていただいた。せっかくの機会なのだから、みんなで楽しもうというのが私の考え方である。小道具ひとつ、場所ひとつでもみんなで協力した方が愛着がわく。皆さんの協力で1シーン、1カットができたのである。

本の紹介

ウイルソンの『生命の多様性』とドーキンスの
『Climbing Mount Improbable トンデモ山に登りて』
池田博明

ウイルソンの『生命の多様性』は岩波書店からI II 2巻本として出版されている。このI巻目にクモは重要なところで登場する。

豊かなハエトリグモの色彩(グラビア)、ジャングルの暗闇で生き物の存在を感じさせるコモリグモの眼(第1章)、不毛のクラカタウに最初に到達した生物としてのクモ(第2章)、視覚的に雄を識別して、生殖隔離を果していると考えられるハエトリグモ(第5章)などである。

『社会生物学』で社会的な話題になる前に、ウイルソンはアリの分類学で業績をあげていたが、『生命の多様性』は分類学者としてのウイルソンを思わせる内容となっている。書名から博物学な内容を連想する人も多いだろうし、PRもそのような方向で行われているが、I巻目はむしろ進化論である。

『生命の多様性』は種の多様性を問題にしているのだから、種とは何かという問題を避けて通るわけにはいかない。生物学的種概念を弾力的にとらえている。

ドーキンスの新刊はファラデーの『ロウソクの科学』以来の王立協会のクリスマス講演をもとにしている。彼の著作はこれまですべて翻訳されているので、この『Climbing Mount Improbable』もいずれ翻訳されると思うが、この第2章「糸の東縫」はアラクノマニアにとっては感動的なことに、そっくりクモの網のデザイン論である。書名のImprobableは「ありそうもない」という意味で、進化の結果として適応的な表現型が実現することを逆説的に表しているものと思う。非科学的な科学もどき本を、最近「トンデモ本」といっているので、その語感にならってみた。もちろん訳本の書名はもっと真面目なものとなると思う。

今年は5・6月の気温が低く、霜注意報や、低温注意報が何回出たこともあり、例年5月の連休に、体長3~4mmに成長し巣をかけるのに、6月15日にやっと2匹近くの雑木林で巣をかけた。我が家の中には、1匹、6月21日巣をかけた。体長3mm、1昨年、卵のうからかえった子グモ（数えられない程沢山 300まで数えた）をプラスチックのカップで飼つたが、1週間他へ出ずに1匹1匹が糸をはって納豆のようになっている。日中の気温は16℃~18℃、木の枝にはなしてやったが、一ヶ所に集まって納豆のようにかたまつた。その間、えさ（はえ）を入れたが食べない。三回ほどカップに入れ戻したり、木にはなしたりしたが、集まってじつとしていた。気温が23℃になった午後、糸を出しタコのように飛んでいった。体長は1.5mm~2mm。7月30日体長7mm。8月に入り気温が上昇、熱帯夜、39度になる暑さで、8月24日には体長オス1cmメス1.3cm、巾は細く、色は白っぽく、例年のクモに比べて、ひとまわりちいさく見える。まだ脱皮をしているのかぬけがらの新しいのが巣の中にぶらさがっているこの状態は7月上旬の頃のクモの姿だ。個体数は、30数匹例年だといるのに今年は1/4だ。低温がたたつのか？一昨年は、8月24日頃には、オス、メスの交接のお見合いのシーンが見られたのに（昨年は9月15日頃）今年は9月中旬すぎになるのではないかと予想している。このことは、8月上旬、科学博物館の自然教育園（芝、白金台）のクモも我が家の中のクモと同じ体長だったので、気温がかなり影響しているのかなと思っている。

いづれにしても、一年で一生を終えるクモにとって、気温が低いことは、成長にかなり影響すること、環境によって移動する動物だけど個体数の減少に気温も影響をしているのではないかと思う。まだ結論ははやいが、意外に成体のメスは寒さに強く1℃の寒さの中でも生きている。昨年は12月3日外で、1℃霜がおりた電線にいた。家の中は10℃、12月10日あぶをつかまえてたべ、15日までいた。

** 事務局だより **

*会員異動

(住所変更)

小林 健一：〒229 神奈川県相模原市大野台5-25-9

野嶋 宏一：〒700 岡山県岡山市西崎2-9-35レ. シャトー201号

野戸 章：〒611 京都府宇治市平尾台2-5-1

(入会)

濱田 叙子：〒720 広島県福山市瀬戸町大字長和1130 市営住宅4-20

森 要：〒252 神奈川県藤沢市高倉507-17

(退会)

小池 麻美（希望）

*「会員名簿」の訂正

p. 2

梅田泰圭 → 梅田泰圭
x o

新しい自分に出会える生活文化情報紙

アエルテ

Community paper for Creative Life by ○STARTS

ENJOY LEISURE LIFE

いきいき余暇



小池牧子・31歳、江戸川区中葛西在住。

蜘蛛アクセサリーを収集
だけど本物も好きなんです

「私は、蜘蛛が大好きなのです。それを知った友人が誕生日のプレゼントに蜘蛛の銀製のペンダントをくれたのがきっかけでアクセサリーを集めるようになりました——小池牧子」

取材を担当する私、実はあまり昆虫が好きではない。特に嫌いなものといえば、ゴキブリ、蜘蛛、蛾、ミミズ……。ただそこにはいるのを見ただけで、思わず悲鳴をあげてしまうときもある。

だから、中葛西在住の小池牧子さんから蜘蛛室に届いたこの手紙を見たとき、いろんな疑問が沸いてきて興味を持った。何がきっかけ? 蜘蛛のどんなところが好きなんだろう? もし家のなかに蜘蛛が出てきたときはどういうアクションするんだろう? 家族も好きなの? 蜘蛛のアクセサリーというのも、あまり目にしたことがないから実際に見てみたい……。

ということで、早速連絡をとったところ、ナント、蜘蛛の研究室、岸田久吉氏の門下生たちが創始者である「東京蜘蛛研究会」に入会し、蜘蛛の生態についても研究しているという、おもしろいじゃない?

早速、話を聞くため、小池さんに会いにいくことになった。呼び鈴を鳴らすと、4歳になる姫太郎ちゃんと一緒に出迎えてくれた。

(2頁へ続く)

毎月1日・15日に新聞折り込みでお届けします。

葛西 2/15
K A S A I
1995

発行:スタートス出版コミュニケーション事業部

MONTHLY SPECIAL ISSUE

新生活の準備など、
絵画式情報満載!

DO SPORTS

話題のオンラインスケートに挑戦!

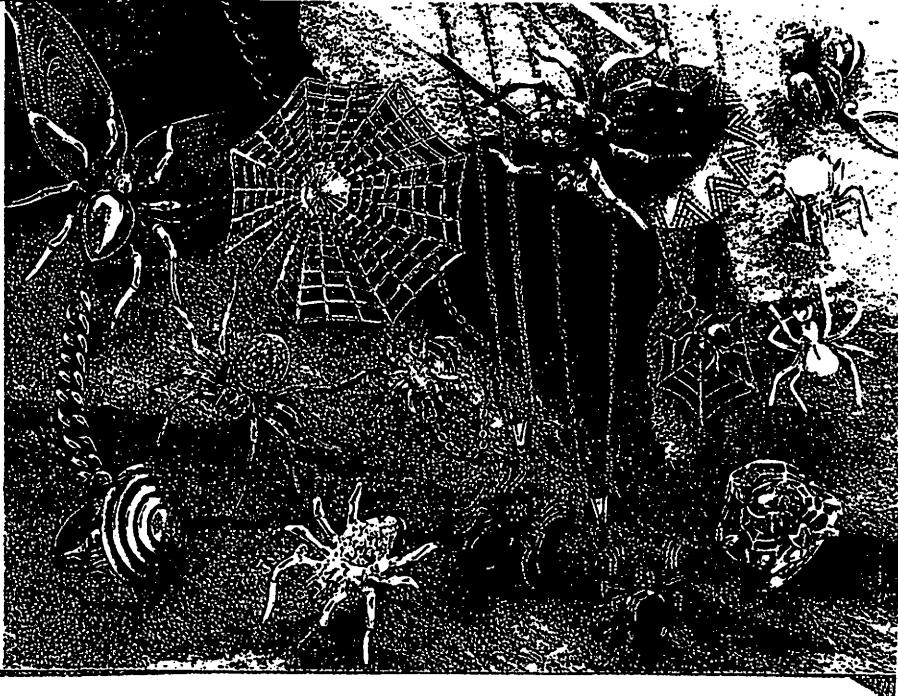
CHART TEST

あなたとお金の関係は……タイプ別お金の使い方
あなたのタイプをチャートテストでチェック! 貧しいお金の使い方



TOWN NEWS

小鳥たちにおうちプレ
ゼント、清新町新春シ
ヤンションショーほか



88号付録 |

いきいき余人

蜘蛛は節足動物。体は頭胸部と腹部にわかれ、腹部には2~4対の出糸突起があっていろいろな性質の糸を出し、用途により使い分ける（講談社「view」より）。

中学校のとき生物で習っておりし、よく見かけもするけど、なんだか知っているようでも知らないよう得体が知れないものに感じる蜘蛛。ふつう、何の根拠もないのに「嫌い」と頭のなかで決めつけている気がする。

「母が全然怖がってなかったからかもしれません。小さいときから、嫌いではなかったですね」

小池さんに蜘蛛を好きになつたきっかけを聞いたら、こんな答えが返ってきた。

意外に単純だった。
中学校の家庭科の授業でテ

ーブルセンターを作った時、小池さんは蜘蛛の巣と蜘蛛をデザインして刺繡した。

「いやあ、クラスでは話題になりました。みんな花とか女の子らしいものを刺繡していく、蜘蛛なんて発想はないですよ。出来はともかく、デザイン賞ものでしたね（笑）」

その後、高校生のとき、小池さんの蜘蛛好きを知った友人が誕生日のプレゼントに、と網と蜘蛛がデザインされたペンダントをプレゼントしてくれた。

「嬉しかった。蜘蛛のアクセサリーもあるんだなあって。それから集め始めたんです」

現在は12個の蜘蛛アクセサリーを持っている。数は多くないが、背山のアンティークショップなどに出かけては気に入ったものだけを買う。

「より宠物に近く、それでいて美しくデザインされたものが好きですね」

アクセサリーを見ると、意外にかわいいものもあってピッククリ。巣と1本の糸でつながった蜘蛛がおもしろくデザインされているブローチ、蜘蛛が獲物である蝶を捕らえているところを象徴的に表している指輪などさまざまなものがある。

表紙の写真右、上から3番目は、ご主人が買ってきてくれたイヤーカフス。

「私の蜘蛛好きを知ったときはゲッソリしましたね。これを買ってくれたときも、「僕の前ではつけないでね」っていうし（笑）」

隣でアクセサリーを興味深げに触っている蚕太郎ちゃん（4歳）は、全然怖がらなくなつたそうだ。

大学生のとき、小池さんは「東京蜘蛛談話会」に入会した。蜘蛛の生態について研究したり、観察会を行ったり、月1回会報も発行している。「新聞で、ワナゲグモという珍しい蜘蛛の写真を撮った人の記事を見て、その人がこの会の人だって知って電話で問い合わせて入会したんです」

実際に生きている蜘蛛に近づき、もっと好きになった。「網の張り方もいろんな種類があるんですよ。蜘蛛は網を張っていて、その網に偶然かかった獲物をエサにしているんです。網にかかった虫もかわいそうだけど、蜘蛛にとつては、もしかしたらこれが何週間かぶりのごちそうかもしれないと思ったら気長だなあって。愛着が沸いてる」

蜘蛛のアクセサリーはこの会の人に会うときにしていくことが多いという。

家の中に、もし蜘蛛がでたら……？

「殺さないで！って違う意味で騒いでます。蜘蛛って感がいいのか、こっちに敵意がなかったら触っても絶対噛みませんよ。触った感じも結構かわいいし（笑）。将来は、みんなに蜘蛛のことをもっと知ってもらえる活動をしたい」

好き、嫌いなんてこんなものかもしれない。ある強烈な経験がきっかけで好きになるのではなく、もの心ついたときには惹かれていた。それが一番純粹で正直な気持ちなんだろうなあ……と思った。

（上妻）



東京蜘蛛談話会の年会報（左）、月会報（右）は、蜘蛛に関する新聞や雑誌などの記事が集められていておもしろい



東京御所跡で古くから伝わる アクティブ・ネイチャリングを横浜で見つけた "ポンチ遊び"=自然教育!



古いポンチを見つけるのも才能であり楽しみを九文化を伝えてくれるのがポンチ遊び。

横浜ボンチ保存会は、83年に誕生したこの会は、昨年10周年を迎えた。ポンチとはハエトリグの一種、ネホンチトコの横浜周辺での呼び方だ。私たちが子供のころは、生け垣や植え込みにポンチが現われるといよいよ春、家に帰ったらカバンを放り、「ハエトリ」の横浜邊で呼んでいた。この時期ばかりは勉強やスポーツが得意な子より、ポンチ遊びの強い子が駆け抜けていた。いいшен子を持つてゐる子には、上級生でも「も一回置いたぐふこす」といふ言葉がいたぐらじこすで使われた。

「一試るのは、同会会員の吉沢一郎さん(46歳)。ポンチ遊びの深さをBE-PAL読者にまで知つてしまひ、と、相談部に写真入りで熱いメッセージを送ってくれた人だ。

横浜ボンチ保存会は、近年またれゆくポンチ遊び、地域文化、また、

具体的で楽しい環境教育の一環として、吉澤(川名興・吉澤一郎著、未来社新)によれば、クモを

開拓せる伝説はかつて流傳から帝國陸軍、九罰官房御山口、広島、

愛媛、高知の沿岸部、南紀伊勢志摩、伊豆、赤穂灘では、日本海では

奈良、若狭、能登、佐渡などに分布

したという。地図に記すとよくわかるが、クモ遊びは、風潮と密接な関係を持った文化なのだ。

使うクモは、ネコハエトリだけではなく、コガネグモ、ナガコガネグモ、

ジグモ、オニグモ、カバキコマチクモなどさまざま。全国的にはコガネクモの仲間が多く、ネコハエトリを使っている地域は東京湾周辺に集中している。

「ポンチ遊びは昔、対岸の岩場や海岸(内見)あたりから漁師が持つてきました遊びなんですよ。海が荒れた日はこれで賭けをしていましたそうです。

吉澤さんは中学校の教師で、生徒のハサミでポンチで大きいつかってたのです。水辺の昆虫や生物、木箱保存会などによると

「横浜ボンチ保存会」83年に誕生したこの会は、昨年10周年を迎えた。ポンチとはハエトリグの一種、ネホンチトコの横浜周辺での呼び方だ。

「私たちが子供のころは、生け垣や植え込みにポンチが現われるといよいよ春、家に帰ったらカバンを放り、「ハエトリ」の横浜邊で呼んでいた。この時期ばかりは勉強やスポーツが得意な子より、ポンチ遊びの強い子が駆け抜けていた。いいしん子を持つてゐる子には、上級生でも「も一回置いたぐふこす」といふ言葉がいたぐらじこすで使われた。

「一試るのは、同会会員の吉沢一郎さん(46歳)。ポンチ遊びの深さを

BE-PAL読者にまで知つてしまひ、と、相談部に写真入りで熱いメッセージを送ってくれた人だ。

横浜ボンチ保存会は、近年またれゆくポンチ遊び、地域文化、また、

具体的で楽しい環境教育の一環として、吉澤(川名興・吉澤一郎著、未来社新)によれば、クモを

開拓せる伝説はかつて流傳から帝國陸軍、九罰官房御山口、広島、

愛媛、高知の沿岸部、南紀伊勢志摩、伊豆、赤穂灘では、日本海では

奈良、若狭、能登、佐渡などに分布

したという。地図に記すとよくわかるが、クモ遊びは、風潮と密接な関係を持った文化なのだ。

使うクモは、ネコハエトリだけではなく、コガネグモ、ナガコガネグモ、

ジグモ、オニグモ、カバキコマチクモなどさまざま。全国的にはコガネクモの仲間が多く、ネコハエトリを使っている地域は東京湾周辺に集中している。

「ポンチ遊びは昔、対岸の岩場や海岸(内見)あたりから漁師が持つてきました遊びなんですよ。海が荒れた日はこれで賭けをしていましたそうです。

吉澤さんは中学校の教師で、生徒のハサミでポンチで大きいつかってたのです。水辺の昆虫や生物、木箱保存会などによると

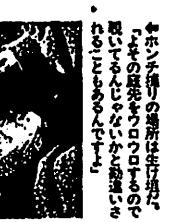
「横浜ボンチ保存会」83年に誕生したこの会は、昨年10周年を迎えた。ポンチとはハエトリグの一種、ネホンチトコの横浜周辺での呼び方だ。

「私たちが子供のころは、生け垣や植え込みにポンチが現われるといよいよ春、家に帰いたらカバンを放り

「横浜ボンチ保存会」83年に誕生したこの会は、昨年10周年を迎えた。ポンチとはハエトリグの一種、ネホンチトコの横浜周辺での呼び方だ。

「私たちが子供のころは、生け垣や植え込みにポンチが現われるといよいよ春、家に帰いたらカバンを放り

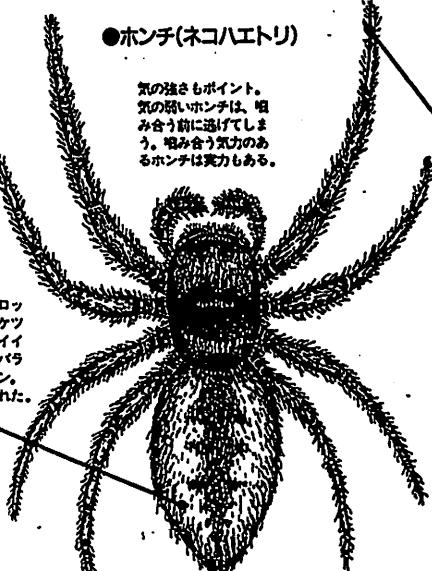
生き物が減れば遊びも消える。「クモ合戦」や、今やそんな絶滅危惧遊びのひとつ。升供たむけに自然と文化の深さを伝えてよひ、横浜で昔の面白小僧たちが頑張っている。



NATURE

●ポンチ(ネコハエトリ)

気の強さもポイント。
気の弱いポンチは、相
み合う前に逃げてしま
う。噛み合う気力のある
ポンチは実力もある。



体が大きいことはもちろんだが、なかでもケン(第1歩脚)の太くて長い脚が強いポンチとされる。

「ネコハエトリ」体長7mm。日本全国に分布するハエトリグの幼虫。頭部は頭部で網を張り、頭部を口吻で捕食する。江戸時代はナントカセヒトコトと呼んでいた。近頃は「ハエトリ」と呼ばれた。金封が附けていた。貧困を脱した家庭の入れ物もあつたといふ。当時からハエトリグをoshiと呼ぶ。せめぬのがいたがうかは示明。

にしている姿見もいるというから、驚きというか笑ってしまう。

「昭和30年代半ばまでは、春になると駄菓子屋にもつ仕切りのポンチ箱が並んだものです。ボール紙に千代紙を張ったもので、これを売る専門の職人さんもいたんですよ。シーズン初め、いかに早くポンチを手に入れるかも自慢の対象だったそうである。そのためには、パパと呼ばれる亞成体を捕まえ、貝殻に入れてフトンの中で温めた。こうすると脱皮が早くなる。また、大きなパパは大きなポンチになるので迷わず捕まえる。先物貰い」というわけだ。

パパの色の変化と具合を見て、あとはぐらかして成体になるかがわかる

といったいうのだから、子供の知識としてはいえあらざれない。

手にしたポンチは、ポンチ箱の中

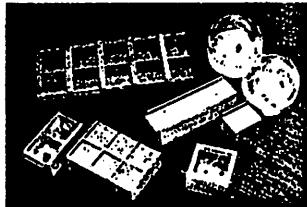
でエサのハエと水(もしくはツバ)をやりながら育て、餌食に備える。

「昔は、箱の中に入れたら上にガラスの板を載せて出られないようにす

るスマッシュでしたが、保存会では、板の上で開けて逃げられるのは避け

ます。というルールでやっています。

今はポンチ自体が減っていますし、自然教育の視点でこの遊びの保存を行なっていますから」



会員の藤井龍臣さんが作った例のポンチ箱、マッチ箱や他の空き箱が使われた時代もある。右のガチャポンの容器は現代のポンチ箱？

板の上で2匹を見合せると、ケンルールは簡単。逃げたほうが負け。密接的になり、負けたほうは負け。密接がついてさっぱり勝てなくなるといふのも、相撲の力士をどこなく見つめている。

(第一歩道) を振りかねてじにじ寄りますが、ここで逃げるやつもいます。まあ、にらみ出し、つていうところでしょうか。気力が互角だと、2回ぐらいケンで押組り合いをする。

それでも一方が逃げなければ、今度は牙と牙を合わせます。この段階でも力が拮抗している場合、いったん離れてケンを下げ、小刻みに体をゆるぎながら押し問答します。これで手は、1相手の後背尻に平たい糸を吹きかける。2後背尻に噛みつく。3握から相手を振り落とす。

4相手が棒から下がったところをすこきずき糸を切って落とす。4つこの時期になると、子供よりも大人が登場になり、仕事や家庭を終えた後の時間帯に、おもむろに登場する人が多くなるといふ。



横浜ポンチ保存会では、毎年春、会員によるトーナメントと、子供たちを対象にしたポンチ遊び教室を開いて普及をはかっている。

大人が夢中／400年続く鹿児島のクモ合戦



鹿児島県加治木町のクモ合戦は、400年の伝統を誇る遊び。毎年6月の第3日曜日に、加治木町くも合戦保存会によってコガネモによる合戦が振り上げられている。地元ではコガネモをヤマフコとよび、闘いに挑むのはすべて入る。競技は一本の横棒の上で行なわれる合戦の行司が立てるわせる。決まり手は、1相手の後背尻に平たい糸を吹きかける。2後背尻に噛みつく。3握から相手を振り落とす。

4相手が棒から下がったところをすこきずき糸を切って落とす。4つこの時期になると、子供よりも大人が登場になり、仕事や家庭を終えた後の時間帯に、おもむろに登場する人が多くなるといふ。

たとえば、競争心が旺盛なポンチは第2歩道で第一歩道をこする。これをペイント研ぐこと。まだ、面部の機械がはつきり出ている個体をテジロッケン、機械が悪く質土色のものを「キンケツ」と呼ぶなど、ホウフツとさせ、面白く。吉沢さんは、強いポンチを持っていた子供には独自の勘があつたといふ。その勘とは、すなはち自然を読み込む力である。強いポンチ手に入れるには、近所の自然に慣れていなければならぬし、弱らないように飼い続けるのにむづつとしたテクニックがいる。

開けるなかでは、ネコハエトリといふ生き物の行動を眺めていた。近所の自然や、その生態系の中での生き物の位置関係。それを知るために、禁止だったというが、これからは学校がポンチ遊びを奨励する時代になるかもしれない。いや、そうなったらしいなあ。

たとえば、競争心が旺盛なポンチは第2歩道で第一歩道をこする。これをペイント研ぐこと。まだ、まだ、面部の機械がはつきり出ている個体をテジロッケン、機械が悪く質土色のものを「キンケツ」と呼ぶなど、ホウフツとさせ、面白く。吉沢さんは、強いポンチを持っていた子供には独自の勘があつたといふ。その勘とは、すなはち自然を読み込む力である。強いポンチ手に入れるには、近所の自然に慣れていなければならぬし、弱らないように飼い続けるのにむづつとしたテクニックがいる。

開けるなかでは、ネコハエトリといふ生き物の行動を眺めていた。近所の自然や、その生態系の中での生き物の位置関係。それを知るために、禁止だったというが、これからは学校がポンチ遊びを奨励する時代にな

'96年10月4日(金)~11月16日(土)

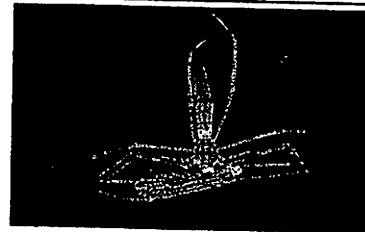


○オーロラ/蜘蛛女 [原実 Rei]
○モリーナ [市村正親]
○ヴァレンティン [吉川浩]
原監督
モリーナの母
マルタ
マルコス (看守)
エステバン (看守)

朝日新聞(広告)
'96. 6. 8

88号付録3

1996年(平成8年)1月3日(水曜日)



環境映像祭 第4回地球『白い馬』は優秀賞
「アース・シジョンズ」の「コトのハンター・クリエイションズによる「白い馬」が選ばれた。優秀賞
アース・シジョンズ (各30万円) には椎名誠
(資金円) にオースト 監督の「白い馬」(田
本)、松林明監督の「知り
られるサル・ライオンタマ
コン」(同)など四作品が
決まりた。

「白い馬」は撮影技
術に優れ、田舎の人々に好
かれない小動物クモを同時に
見取材し、地球上の生命に
に対する新たな共感を呼び起
こした——これが優秀賞
「白い馬」の場面

大賞に「クモの魔術」

の理由。監察は「九九年
から毎年行われ、今年はア
ジア・オゼアニアの十六カ
国から百四の応募があつ
た。」

かわいいタリの話

と、繰り返し回っているのが
十種ほど埋えた。

ダニといえば、嫌われる
のが常格。一人の血を吸
うとが、アレルギーの原因
にならしかず難ばかり。で
も懶けずのせ、知れ
ている六万種のタリの
話」(筑摩書房、千葉正)
が、ほどの一部です。

山中たすむわやうタリ
ところ一群を研究して、
自然の掃除屋として大切
な役割を果たしている。三
十年以上前から研究を始めた
のまごいる。「といひなア
シカ、この仲間はまだ日本
に七種しか知られていない
た。それが今は約五百五

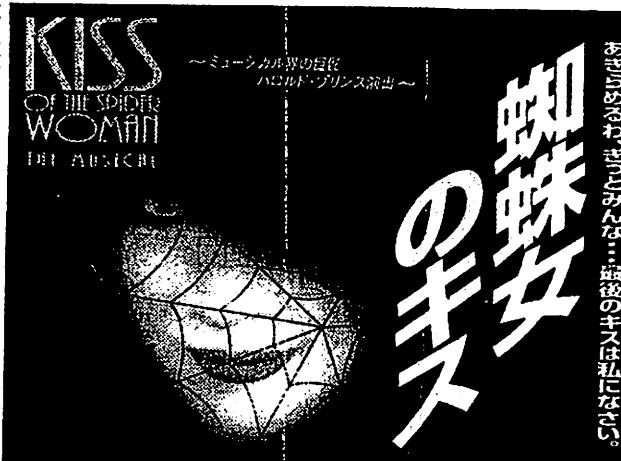


あさひなわ、まうとみんな…最後のキスは私になさ。



横浜国立大学環境科学研究所
ヤンターの青木淳一教授
種として名前をつけてきた
た「身の回りど、こんなにも
二の話を聞いてほっこ」と
の想いを込め、豊富な題題
を著書「タリにまつわる
まだ自然界のどこ一部だと
いうあかじじょわね」
にまとめた。

山中たすむわやうタリ
物の種類や生態などをとに
した環境診断に力を注ぐ。
タリには、自然が豊かな場
所でしか暮らせないものか
ら、劣悪な環境に耐えるも
のまでいる。「といひなア
シカだと思わないで、せ
ひ環境アセスメントなどに
採り入れてほしく」



朝日新聞(夕刊)
'96. 5. 16

梅林 力さん提供



あおき・じゅんいち 1935年生まれ、東洋大学院生物学系研究科博士課程修了。77年4月から横浜国大教授。95年、同大環境科学研究センター長に就任。日本動物分類学会会長、県境地形評議会会長、日本ダニ学会の副会長。

横浜国立大学教授 青木 勤一さん

大事な自然史の研究 ダニなどで環境を診断

「神奈川の自然は海ある山ありで多様。箱根、丹沢、三浦半島などに生物相は豊かだが、全国的に見て貧富差はそれほど多くない。生物分布の北限域に位置しているじめもある。だが、北限を重要視し過ぎ、端っこ生物は対象外で特別天然記念物のトキにだけいくつもいるのが、だらけた生物相は豊かではない。最も大切に生物が指定された」

「神奈川の動植物は危機的な環境に置かれていることが、あらためて浮き彫りにされました。今やこれら野生生物の保護が急務です。

一昨じつドータ生物園で、神奈川の動植物は危機的な環境に置かれていることが、あらためて浮き彫りにされました。今やこれら野生生物の保護が急務です。

「神奈川の自然は海ある山ありで多様。箱根、丹沢、三浦半島などに生物相は豊かだが、全国的に見て貧富差はそれほど多くない。生物分布の北限域に位置しているじめもある。だが、北限を重要視し過ぎ、端っこ生物は対象外で特別天然記念物のトキにだけいくつもいるのが、だらけた生物相は豊かではない。最も大切に生物が指定された」

「神奈川の動植物は危機的な環境に置かれていることが、あらためて浮き彫りにされました。今やこれら野生生物の保護が急務です。

「ダニは六万種以上で、人間や畜産の血を吸い、悪者扱いされることが多いのです。前後。異日光での調査では、土壌一年生植物など、平均一万五千匹、最高で三万五千匹以上もひしめいていた。落葉植物をバクテリアの死生によるようだとかみえていた。電子顕微鏡で見ると形は実に美しい。このダニはトキの卵を食べ、その種は安泰といえる」

「自然記念物には、ある種がトキと一緒に天然のトキにだけいくつもいるが、だらけた生物相は豊かではない。最も大切な生物が指定された」

「ダニは六万種以上で、人間や畜産の血を吸い、悪者扱いされることが多いのです。前後。異日光での調査では、土壌一年生植物など、平均一万五千匹、最高で三万五千匹以上もひしめいていた。落葉植物をバクテリアの死生によるようだとかみえていた。電子顕微鏡で見ると形は実に美しい。このダニはトキと一緒に天然のトキにだけいくつもいるが、だらけた生物相は豊かではない。最も大切な生物が指定された」

「ダニは六万種以上で、人間や畜産の血を吸い、悪者扱いされることが多いのです。前後。異日光での調査では、土壌一年生植物など、平均一万五千匹、最高で三万五千匹以上もひしめいていた。落葉植物をバクテリアの死生によるようだとかみえていた。電子顕微鏡で見ると形は実に美しい。このダニはトキと一緒に天然のトキにだけいくつもいるが、だらけた生物相は豊かではない。最も大切な生物が指定された」